

展示会「蓮の花の知恵 インドの児童文学」展示概要解説

インド児童文学の会代表・本展監修者
鈴木 千歳

展示の構成（タイトルの蓮の花はインドの国花）

インドの伝承文学の塔：インドから伝播した日本の民話

インドにおける伝承文学

インドの児童文学の塔：児童文学・絵本・伝記・教科書・文字・言語

識字・国土・その他

特別コーナー：

（右奥）I B B Yインド支部事務局長マノラマ・ジャファ氏企画によるインドの国外に伝わった『パンチャタントラ』の本、絵などの関連資料および寄贈資料

（左奥）カレーはインドからきたの？

（左手前）インドの遊びと子どもたち、インドのお祭り

（右手前）インドの民族衣装サリー

はじめに

只今ご紹介いただきました鈴木千歳でございます。

はじめに、インド児童文学と私の関わりについて少しお話させていただきます。

1985年ですから今から約20年前のことになりますが、ユネスコ・アジア文化センター主催のユネスコ活動指導者海外派遣事業にインドの児童図書出版社チルドレンズ・ブック・トラストを訪問するプログラムがありまして、私は大変興味を持ち参加しました。と申しますのは、その当時つまり20年前の日本には、インドの児童文学に関する情報は皆無といえるほどで、「インドに子どものために本を書く作家がいるのだろうか」とおっしゃる先生方もおられました。

実際にインドに参りまして、私は大変驚きました。実に活発な活動が展開されていたのです。

その時、ここにおられますマノラマ・ジャファさんから頂戴した古代インド説話集の絵本『パンチャタントラ物語』の表紙の絵を見まして、再び驚きました。それは日本の民話「猿の生きぎも」の絵そのものだったからです。私は、いわゆる伝承文学が国境を越えて伝播することは承知しておりましたが、これは、まさにその現場に立ち会ったような不思議

議な感動と驚きでした。この感動が本展示会の根底にあります。

「猿の生きざも」のほかにも、馴染み深い日本の民話の中に、インドから伝わってきたお話が数多くあります。次にそれらについて述べてみます。

インドの伝承文学

・インドから伝播した日本の民話

6世紀中葉の日本への仏教伝来は、漢籍仏典を通して間接的であったとはいえ、その後の日本文化の形成に大きな足跡を残しています。インド児童文学の日本への紹介も、当然ながら、仏典にみられるインドの伝承文学からはじまりました。

日本に渡来した漢籍仏典には、インド古代説話で釈迦の前世の善行を語った「ジャータカ」(インドで起源前3世紀頃から伝わると考えられる)の中の話も含まれており、それらが、日本の仏教説話「今昔物語集」(12世紀)の天竺部や「沙石集」(13世紀)他に編まれています。時の流れと共に、やがて話の面白さが、宗教色から離れて一人歩きをはじめ、独自の物語として子どもにも親しまれる下記のような日本の民話に定着していきました。動物物語を主とするインドの寓話集「パンチャタントラ」(6世紀以前に成立か)にも「ジャータカ」と同じような話が入っています。

1) サルの生きざも

サルがワニにだまされて海に連れ出され、生きざもを狙われるが、とっさの機転で、きもは木に干してきたと云いつくろって命拾いをする。

2) ネズミの嫁入り

親ネズミが世界で一番えらい花婿選びのために、太陽、雲、風、塀、と探す結局、塀をもかじるネズミが一番だと分かって、ネズミを娘の婿にする。

3) りょうしとウズラ

獵師に網をかぶせられて捕まりそうになったウズラの一群の王が、一致協力して網を持ち上げて同時に飛び立つようによろ命令し、ウズラを助ける。

4) サギとカニ

サギがカニをだまし一匹ずつくわえて飛び立ち、別の場所で食っていた。最後のカニが仲間のカニの死骸を見つけ、怒ってサギの首を爪で切り殺す。

5) カメとサギ(おしゃべりカメさん)

カメが、二羽のサギで両端をくわえた棒の真中を口にくわえて空を飛ぶ最中、言いつけを守らずおしゃべりして、棒からはずれ地上に落ちこちる。

6) 古屋のもり

古屋の馬を狙うオオカミと泥棒が、漏りほど怖い物はない、という爺婆の言葉を聞いてびっくり。落ちてきた泥棒を、さては、あの怖い「古屋の漏り」と思いこみ、キツネは泥棒を背に乗せたまま一目散。

7) 月とウサギ

月にウサギの姿が見えるのはなぜ？ 托鉢の坊様に自分の体をお布施にして焼いて食べて頂こうとしたウサギが、焚き火の中に飛び込むと、このウサギの信心を称えて、托鉢の坊様に身を変えていた神様が、ウサギの姿を月に描いたから。

これら以外にもインド起源の日本の民話はあると考えられますが、ここでは、次の文献で資料的裏付けの取れる話で、民話のみを取り上げるにとどめました。「古屋のもり」は日本の民話に近い型の話がインドのベンガルなどで語られています。

漢籍仏典を通じて日本に渡来した説話は、やがてインド起源であることが忘れられ日本の民話になっていきました。

例えば、江戸時代の子ども向け冊子である通称「赤本」(東洋文庫から借用のため期間展示)に、インドの説話「サルとワニ」が「猿の生きぎも」として載っています。ただしこの話ではワニはカメに変わっています。

日本が鎖国を解いた後も明治の中期までは、インド起源の話が日本の民話として子ども向けにでていますが、やがて海外の文献が次々に日本にはいつてきますと、日本の話ではなくインドの話として紹介されはじめました。それは、明治 33 年(1900 年)巖谷小波が刊行を始めた『世界のお伽噺』に載ったジヤコブス編の第 13 篇「預言書」や第 20 編「光明姫」の頃からであろうかと考えられます。この本には、インド民話から取ったと明記してあります。

時代を下っていわゆる大正デモクラシーの時期になりますと、自由な児童教育のための児童雑誌が相次いで刊行され、「赤い鳥」大正 12 年 11 月号に鈴木三重吉による再話「虎と乞食」が、インドの民話から取ったとの説明つきで載っており、これが『象の鼻』に入っています。

大正から昭和にかけて、古代インド叙事詩の「マハーバーラタ」や「ラーマヤナ」、仏教説話集「ジャータカ」や動物寓話集「パンチャタントラ」、「パンチャタントラ」の改訂版とされる「ヒトバデーシャ」、「カタ・・サリット・サーガラ」などの本格的伝承文学の紹介が続きます。

第二次世界大戦中は、インドを大東亜圏内にとらえる時局の中で出版された本も数多くみられ、その後現代までインド伝承文学の本は出ています。

講演関連資料のリストには、明治 33 年（1900 年）から平成 15 年（2003 年）までの過去 103 年間で 496 タイトルの出版数が載っており、その内の 307 タイトルが伝承です。勿論この数字は 100%を網羅してはおりませんが、伝承文学が半数以上を占めているという結果に基づき、本展示にはまず伝承の塔を独立させて設けることになりました。

・インドにおける伝承文学

インドは、伝承文学の宝庫で、その伝承は現在に生きつづけています。古代インド最古の聖典「リグヴェーダ」からはじまり、無名の詩人や語り手が伝えた伝承文学。古代叙事詩で前 10 世紀頃の親族間の骨肉相食む闘いを語るとされる「マハーバーラタ」、その挿話である「ナラ王物語」や「サーヴィクトリー物語」、そして日本の謡曲「一角仙人」や歌舞伎「鳴神」への影響。3 世紀頃に現在の形になったと考えられるラーマ王子が羅刹（悪魔）を退治する物語「ラーマヤナ」。時代が下りこれらの伝承を素材にとり入れて書いた 12 世紀の作品であるジャヤデーヴァ作サンスクリット語「ギータ・ゴーヴィンダ」（牛飼い人クリシュナの歌）、16 世紀のトゥルフィダース作ヒンディー語「ラーム・チャリト・マーナス」（ラーマの行いの湖）。古代説話集ジャータカ、パンチャタントラ、ヒトパーデーシャ、カター・サリット・サーガラなどの解説と日本への伝播や影響および次の話にふれています。「月と兎」、「王様と鹿」、「子引き裁判」（大岡越前の「子裁判」や旧約聖書のソロモン王の「剣が子どもを二つに分ける」に影響）、「鼠の嫁いり」、「臆病な羅刹」（「古屋のもり」のモチーフ）、「空想にふけるバラモン」、「乳しぼりの女と牛乳つぼ」、「青い山犬」、「猿の生きぎも」、「獵師と鳩」、「亀と二羽の白鳥」など。これらの伝承文学のヒンディー語、パンジャブ語、カンナダ語や英語や日本語の本、そしてインドのいろいろな言語に訳されたパンチャタントラ絵本やインドで出版されたパンチャタントラ物語の障害児向け触る絵本（資料一覧 27、28）も展示してあります。

インドの児童文学の塔 児童文学・絵本・伝記・教科書・文字とことば・識字・児童書出版事情・インドを知ろう・その他

・児童文学

インドでは児童文学の概念は宗主国である英国からもたらされたとされます。植民地時代には、英国人ですがインドを舞台に作品を書いた R.キップリングの自筆の手紙つき英書 *The jungle book*.1894 95 や *Kim* 1901 およびそれらの邦訳本。今回展示されてはいませんが、『ちびくろサンボ』も植民地のインドに住んでいたイギリス人ヘレン・バンナーマンの作品です。ベンガルの詩聖タゴールには詩集『新月』、『ギタンジャリ』のほかに児童文

学『カブルからきたくだもの売り』があります。植民地時代の初期には、英語はインド支配のコミュニケーションの手段でしたが、やがてインド人の自己表現として英語で作品が書かれるまでになり、D.G.ムカージは英語で児童文学を書いた最初のインド人の一人です。彼の『ヒマラヤの伝書ばと』はニューベリー賞を受賞しています。

1947年イギリスからの独立後は、インド人作家による創作が多く書かれるようになり、その推進力となったのが政治風刺戯画家 P.シャンカルです。彼は次代を担う子どもたちの児童文化向上が急務であるとして、ニューデリーに児童専門出版 CBT 社や IBBY インド支部の母体である AWIC を創設しました。シャンカル賞第 1 位を受賞したアルプ・クマル・ダッタ作『密猟者を追え』は英語インド創作児童文学の曙といわれます。同作家の『盲目の目撃者』アニタ・デサイ作『ぼくの村が消える』AWIC 会員短篇集『トラの歯のネックレス』などの邦訳。アングロ・インディアンで父親がイギリス人であるラスキン・ボンドの英文原書 *Ruskin Bond's treasury of stories for children*. ベンガル語では、映画監督のサタジット・レイ作『黄金の城塞』などが展示されています。

- ・ 絵本：現在のインドの絵本には、1. 古代から伝わる伝統的民族画、2. リアリスティックな絵、3. 図案化した絵の特徴が見られ、それらが混在している場合もあります。ラマ・チャンドランの作品（展示）には 1. と 3. ジャグデシュ・ジョシーの作品には 1. と 2. の特徴がみられます。その他の絵本。（展示資料 116、155）
- ・ 伝記：関連資料によると戦後ぬきんでて目につくのがガンジーの伝記です。ガンジーが平和への非暴力運動の象徴であり、インドを代表する人物として日本に根強く定着している事がよくわかります。他にインド独立後初代首相ネルーやその娘で同じく首相になったインディラ・ガンジーの伝記など。愛娘の名前をつけてネルーが 1949 年に上野動物園に贈り、戦後の日本の子どもも大人もおおいに喜ばせた象のインディラの写真もあります。
- ・ 文字と言葉：教科書（ヒンディー語やタゴールによるベンガル語の教科書）、多言語、さまざまなインドの言語に訳された絵本、識字教育（J B B Y インド識字基金の支援によりインドで出版されたアルファベット絵本）。
- ・ インドの児童書出版事情。
- ・ インドを知ろう：位置、国土、自然、農業、国旗、世界遺産。

以上、本展示では、全体として古代インド伝承文学やその日本への影響から現代インド児童文学までの流れを中心に、遊びや祭りなどインドの子どもたちの文化の一端にも触れて紹介しています。皆様のインド理解の一助となれば幸いです。

講演関連資料

「日本におけるインドの児童書 仏教説話から現代まで」

附・リスト「日本語で出版されたインド児童書 1900年(明治33年)~2003年(平成15年)」 鈴木千歳 (「インド児童文学の会」会誌「チャンパの花」第5号掲載)